

ずいそう

おやひこさま

田村 秀弘



霊峰弥彦山をご神体として、弥彦山の麓に鎮座し「おやひこさま」と呼ばれて親しまれている彌彦（やひこ）神社。正式には「いやひこ」と呼ぶらしいが、地名などが全て「やひこ」と読む関係で、一般には「やひこ」と呼ばれているようだ。新潟市から車で約1時間の格式高い「越後一宮」である彌彦神社に、当社の安全祈願の参拝に訪れた。

参拝前の下調べによれば、創建年は不明らしいが二千年以上の歴史があり、万葉集にも二首歌われている。御祭神の「天香山命」（あめのかごやまのみこと）は、「天照大神」（あまてらすおおみかみ）の曾孫（ひまご）にあたり、『古事記』の時代に神武天皇から越後の国の開拓を命じられた。その天香山命は越後の地元民に漁業、製塩、養蚕、稲作を教え、越後を開拓した祖神として「仕事運」、そして、天香山命が夫婦仲良く暮らしていたことから「恋愛運」、さらに、源義経、上杉謙信らが厚く信仰していたことから「勝負運」と、それぞれの運勢アップのパワースポットとして、お参りが盛んなのだという。

入り口である「一の鳥居」で一礼をした。早速下調べで知った注目のポイントである。写真ではわかりづらいが、この「一の鳥居」は親柱と呼ばれる部分が数センチ浮いている。これは雪による浸食を防ぐためであり、豪雪地帯ならではの雪対策なのだ。写真を撮影のために近くに寄ってみたが、その数センチの空間に手を入れてみたくなる衝動はなんとか抑えることができた。

境内に入ってくると、静かで気高く、厳かな雰囲気と新緑に包まれていた。マスクを着用していなければ思いっきりの深呼吸をしたと思う。

そのまま進むと、左手には「玉ノ橋」と呼ばれる赤い橋が見える。下調べをせず、まっすぐ前を向いて歩いていると見逃してしまいそうだ。境内の建造物の中に「玉ノ橋」の記載があり、室町時代の境内古絵図にも描かれている。「玉ノ橋」は、神様が通る橋と言われ、人は渡ることができない。明治29年（1896年）に改築され、明治45年（1912年）の弥彦大火の際、「玉ノ橋」だけが焼失を免れ、その後、一時移転されていたが、昭和60年（1985年）の御遷座70年奉祝を機



として、修理復元された。

木々が溢れ、清々しい空気が漂う参道を進むと、神



符授与所が右手に見えてきて、そのさらに右奥に台座の上に並ぶ二つの石「重軽の石」があり、ここでは運試しができる。願い事を念じながら、どちらか一方の石を持ち上げる際に、軽いと感じたら願いは叶いやすく、重くて持ち上げられない場合は努力が必要とされている。この「重軽の石」を、社内安全を念じながら実際に持ち上げてみると、重量感はあるものの、両方とも持ち上げることができた。しかし、「どちらか一方」ということをすっかり忘れて、両方とも持ち上げてしまったが、さて、願い事は叶うかどうか。いや、叶ってほしい！

いよいよ国の重要文化財にも指定される「拝殿」に到着。ご神体の弥彦山が後ろに見える。写真を撮影するには青空が良かったのだが、本日は曇り空で午後から雨という予報。まあ、しかし、参拝に天気は関係あるまい。そして、ここが今回の彌彦神社参拝のための下調べが最も活きた場所であったのだ。普通の神社お参りの作法としては、「2礼2拍手1礼」だが、こちらでは「2礼4拍手1礼」である。ちなみに出雲大社も拍手は4回で、伊勢神宮は8回である。丁重に拝する心を表す作法と伝えられてきたとのことだが、なんと、境内のどこにもそのような作法の説明書きが無い。もしや、この彌彦神社での作法は越後の民にとって、



それが当たり前すぎるのか。休暇明けに新潟生まれ、新潟育ちの社員にぜひ確かめてみたくなった。

お賽銭を入れ、2礼の後、拍手を4回、大きな音でうまく打つことができた。仕事柄、安全祈願の機会が多いからだろう。人出はさほどではないこともあり、時間をゆっくりかけて「住所、氏名」を先にブツブツとお伝えしてから、願い事である社内安全をさらにブツブツと念じた。これは妻から教わったことだが、神様は参拝者がどこの誰か分からないので、まず先に住所と名前を先に伝えなければ、願い事は叶わないそうである。

参道を戻り、神符授与所でおみくじを一つ引いてみた。開いてみると、小吉。願い事は叶わぬ、とのこと。

実はこの私、初詣や会社行事の新年安全祈願でおみくじを引いた記憶がない。「拝殿」へ向かうときに、参拝を終えた二人連れのご婦人らが、そろって大吉と喜んだ姿を思い出したのだ。あやかりたいものだと思います、この神聖な弥彦神社で、つい浮かれてしまった自分に反省しつつ、「拝殿」での願い事は叶えてもらいたいものだと、「一の鳥居」の下で振り返り、一礼。

—たむら ひでひろ 大成ロテック(株)北信越支社 支店長—